

クリスマス、おめでとうございます。今年もクリスマスを迎えることができ、感謝である。教会に在任中は、クリスマスは多忙であったが、隠退すると、静かなクリスマスを迎えることができる。しかし、クリスマスの讃美歌を歌うことが少なく、多少淋しく思う。

クリスマスは何と言っても、マリアが主役である。ナザレの乙女マリアのところに、天使ガブリエルが遣わされ、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と声をかけた。マリアは、その言葉に戸惑っていると、「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい」と言われる。天使ガブリエルによる受胎告知のシーンである。

天使は「おめでとう、恵まれた方」と声をかけているが、マリアは恵まれた方としておめでとうと言われる人であったか。彼女にはヨセフと言う大工のいいなづけがいた。しかし、結婚前に身ごもった訳で、これは当時においては受け入れられず、非難されることで、蔑みの声のごうごうと上がったに違いない。マリアはそれに耐えなければならなかった。ヨセフはマリアの出産を受け入れ、夫婦となった。二人の間には、イエスを頭に男児がヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの5人、女兒は名前が書かれてないが、「姉妹たち」とあるから2人以上、計7人以上が生まれている。多くの子どもが与えられ、神の祝福に与っている。ところが、夫ヨセフは聖書の記述から消えているので、亡くなったと思われる。するとマリアは、子沢山の寡婦になったということである。彼女は子どもたちの養育に苦労したに間違いない。女性は職に就けない時代であるから、長男イエスに助けられて過ごしたのではないか。頼りのイエスは30歳の頃、ナザレを去り、ガリラヤ湖周辺で「神の国」の宣教に向かった。主イエスの宣教は、飢え、渴いた民衆の支持を受け、枕するところがないほどの多忙を極めた。更に、主イエスの宣教は、苦難を負う民衆が人間に立ち返る、時代の価値を変える福音であった。支配者たちは作り上げてきた体制が壊されると、主イエスの殺害を目論むほどになっていた。母マリアや弟たちは「神の国」の宣教を止めさせ、ナザレに引き戻そうとしたが、主イエスは「私の母とは誰か。わたしのきょうだいとは誰か」と言い、帰郷を拒んだ。やがて、エルサレム神殿当局の策略によって、十字架の刑に処せられた。母マリアは十字架の下にきて、息子の十字架刑の激痛の死を見届けている。母として、これほどの悲しみ、苦しみはない。マリアの生きた現実は、恵まれていることとは対極にあるような状態で、女性として、最も悲惨な苦労を負った人と見なされる。

ブラジルに行った時、黒いマリア像を祀ったアパレシーダを訪ねた。漁師が川で網を打ったところ、入っていたという50cmくらいの黒いマリア像が高い所に安置されていた。このマリア像を拝むために、何百万人の人々が押し寄せてくる。ブラジルの黒人女性たちは、抱えきれない苦悩を抱え込んでいる。白人の女性たちの苦悩も深い。彼女たちは、マリアは自分たちの苦悩を分かってくれると、黒いマリア像に自分自身を重ね合わせて、拝みに来るのである。私はマリアを正しく理解しているのは、彼女たちではないかと思った。

天使ガブリエルはマリアに「おめでとう、恵まれた方」と呼びかけている。それは次の「主があなたと共におられる」からである。神が共におられるから恵まれているのである。クリスマスは、主イエスを迎える喜びの祝祭である。主イエスを迎え入れて、主と共にある人は、どんな苦難の生活が与えられていようとも「おめでとう、恵まれた方」と言われ、祝福していただける。クリスマスはこの恵みを喜び、祝い合うことである。